
鋼騎伝

冴神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼騎伝

【ZINE】

Z7250Z

【作者名】

汎神

【あらすじ】

ある大陸を舞台に男たちが集う。偶然か、あるいは宿命か。鋼鉄の巨人が躍動し、騎馬が駆ける。天命により集いし男たちは、その身に誇りを宿し、戦場を馳せる。今、ファンタジー群像劇が幕を開ける。

第一章 第一部（前書き）

初めての投稿になります。基本的に拙文、遅筆ですので、「ご了承ください。

第一章 第一部

月下、風が揺れていた。

白銀に光る鎧に身を包んだ巨人が、動いていた。数は十五より少し多いくらいだろうか。それらは胸の紋章の有無から二種類に分けられる。白禽の紋章を刻まれている、鋼鉄の巨人、騎神が剣を突き刺す。剣先が、相手の胸に潜り込むと、その騎神はそのまま押し通し、相手を貫く。背中から突き出た剣先は、鈍く光る銀のような、粘り気のある液体に包まれていた。よく見ると、表面が仄かに赤い。騎神はそれを思い切り引き抜くと、その液体を拭つた。

ガウスは自身の騎神に剣を拭わせ、液体を落とすと鞘におさめさせた。

視界の片隅では、月明かりの下、巨鎧と賊徒達の死骸が草原を覆つた。あまりの数の多さに、ガウスは一瞬、自身の目を疑つた。それほど、数が多くつた。死体だけでも三十近くある。その中には、身体の骨が碎かれたものもあれば、磨り潰されたような死骸もあり、目を覆いたくなるようなものばかりだった。

全身が金属でできている騎神の前には、歩兵はあまりに小さく、脆すぎた。それは、ここにはいないが騎馬にしても同様である。

その絶対数は少なくとも、白兵戦から攻城戦にまで広く用いられる騎神の優劣で、戦況は容易く変化してしまう。そんな騎神と対等に戦えるのは同じ騎神か、その紛い物の巨鎧だけである。

傍らで懸命にしがみついている少年に声をかける。顔色が悪く、背中をさすつてやる。しかし、持たせていた弓と矢は、懸命に手離そうとしなかつた。

「被害状況を調べろ」

ガウスは後に居た副長にそう言つと、副長は張りのある声で了解し、騎神の巨大な足で死骸を踏みつぶさないように、草原をゆっくりと歩き始めた。騎神から降り、その背中を見つめたガウスはよ

うやく全身の力を抜いた。

「聖地に赴こうという時に……」

ガウスは唇を噛み締めた。聖地奪還を大義とするこの聖戦に赴くその途中に賊徒の攻撃を受けるとは、思いもよらなかつた。動きも良く、元々騎士や歩兵と言つた軍属だったのかも知れない。対騎神用の大きな弩を持った兵も居た。

はじめは、遠くで何かが蠢いている、そんな気配しかなかつた。昔から、田は非常に良かつた。そして、それに気づいているのは、自分だけの様であつた。ガウスは長弓を取り、それに向かつて射ると、遠くで何かを射抜いた。それが、始まりの合図になつた。僅かな隆起に身を隠していた弩を構えた賊徒が姿を現した。ガウスは瞬時に弓で五人を射抜いた。しかし、賊徒の方も弩を撃ちながら近づいて来て、さらにしばらくすると、巨鎧が姿を現した。その時は既にガウス達も騎神に乗り込んでいた。

しばらく草原を駆ける風に身を任せていると、副長が騎神から降りて報告に来た。

「騎士が四人殉職しました」

ガウスがその騎士四人の名前を副長の口から聞くと、眉間に皺をよせ唇を噛んだ。副長は、僅かに沈黙した後続ける。

「騎神も一騎使用不可能……それと兵糧が全滅です。賊徒の別働隊の仕業です」

「その別働隊は」

「すぐに殲滅されました。歩兵と巨鎧で構成されておりまして、おそらく初めから賊徒の目的は我々の兵糧の強奪が目的だつたのだと思ひます。しかし、追い詰められた時、賊徒が自棄になつたらしく燃やされたりしました。兵糧を入れていたサックだけはいくつか無事ですが」

「そうか。賊徒達の死体は埋めてやれ。それと、騎士達の死体をこ

こに」

騎士達の死骸を一か所に集めさせた。四人の内、一人は身体に矢

を射かけられて死亡していた。騎神に乗るのが、間に合わなかつたのだ。そして、もう一人は体の半分以上が失われ、すでに人の体をなしていない程の、無残なものであつた。騎神や巨鎧同士の戦闘では、決して珍しい光景ではない。

その前で跪くとガウスは拳を握り、自分の胸と額に軽く触れた。背後の少年が嗚咽を漏らしているのを見て、ガウスはそつと声をかけた。青い眼の周りを赤く腫らしており、言葉もうまく出ないようだつた。ガウスはその小さな金髪の頭をそつと抱き寄せると、「エール。彼らの魂が主の元へと還るだけだ。だから、そうあまり悲しんでばかりいるんじゃない。ただ、私たちに彼らのために出来ることがあるとするならば、彼らのことを忘れないことだけだ」まるで自分にも言い聞かすようにそうガウスは話した。エールも一度大きく鼻をすすると、必死に泣き止もうとした。

行軍は一時中断せざるを得なかつた。ガウスはまず現在地から一番近い町へと移動することにした。幸いにもまだここは神国の内だ。首都へと兵糧を要請しても良いし、最悪現地でそれを賄うことも可能なはずだ。

「これより白禽騎士団は南下、ロイドへと向かう

首都サンテルニアへ賊徒出現の通知と代わりの兵員の補充も考えねばならないな、と頭の片隅でよぎり、ガウスは自分の薄情さに思わず、一度短く笑つた。

草原から、広い街道へと出てそこから町へと向かう。永い時を経て踏み慣らされたその道は、例え騎神が踏みしめようと、そう簡単には荒らされなかつた。そこから、細い脇道のようなところに足を踏み込んだ。ロイドへ向かう、唯一の道だ。森が近くにあるのか、木が茂つてくる。

損傷した騎神と死骸はマントに包み、丁重に運んだ。せめて、誰も居ない草原よりは、寂しくない町の近くへ弔つてやりたかった。そうすることで、一人でもそういう男たちが居たことを、覚えてもらおうと思ったのもしれない。

「全員一時待機」

町への門の前で騎士達が整列する。自身が帰つてくるまでの団の指揮を副長に委託し、ガウスはエールを伴つて街へと入った。町の守衛の兵一人がこちらに敬礼をする。聖戦中ということで、その顔には極度の緊張が伺えた。

舗装されている道を挟む両側の家々は既に明りが消えており、薄暗い月明かりの中、町は静かで冷たく、そして孤独に感じた。

そんな中一件だけ明りがついていた。中から男達のだみ声が響いてくる。ほのかに酒のにおいが漂い、エールは思わず顔を顰めていた。だがガウスは、この町に嘗みがあることを確かめることができ、すこし安心した。

一人は教会へと赴いた。扉を叩く。しばらくすると、恰幅の良い、白髪の男が現れた。

「これは騎士団長様、どうかなされましたか」

男は恭しい口調でそう告げた。ガウスは賊徒に夜襲を受けたこと、それにより兵糧をすべて失つたこと、そして、騎士が何人も死んだことを告げた。それを聞いた司祭は静かに拳を握り、目を閉じると拳で軽く胸と額を叩いた。

「ほかの騎士は」

勘の鈍い司祭の言葉に、少しばかり苛立つもガウスは、

「今、門の前に待機させている。それよりも、殉職した騎士達を弔つてほしい」

「分かりました。では、団長様今夜はこちらでお泊りになりませんか。部屋ならばすぐにお用意できます」
「いやいい。まだ行軍中なのだ。彼らの遺体だけは、頼もう。今夜も野営で過ごす」

「そうですか。何かありましたらすぐにお申し付けを」

最後まで、その司祭の言動にはどこかこちらの機嫌を伺つような態度がにじみ出していた。まるで、何か後ろめたいことを隠しているかのように、ガウスは感じた。エールなどは、自分より敏感に、そ

れを感じ取ったかもしない。子供はそういうものに鋭い。

二人はその司祭に礼を述べると、門の前へと戻った。そこには騎士達が、命令を下した時と全く同じ格好で立っていた。それから、数人に遺体を町の中に運ばせると、町の近くで野営をした。

行軍中ガウスは他の兵たちと同じく、晴れた日は地べたで眠り、雨の日は騎神の体を屋根にして、あるいは乗り込んで毛布に包まり雨風を受けながら眠った。団長だからと言つて、権力に驕り、自分ひとりだけ簡易営舎の中で惰眠をむさぼるような真似だけはしたくなかった。それに、焚火を囲み騎士達と話をすることが好きだった。だが、今日だけは会話ができるような雰囲気ではなかつた。

自身の騎神に軽く触れると、もう既に全身が冷めていた。

翌日、目を覚ますと、すでに騎士の何人かは起きていた。身支度を整えていると、副長が二、三人の男を連れてきた。騎神も一体起動しており、別の騎神の甲冑の留め具を外し、剥がしていた。

剥がした甲冑の下、騎神の内部は何度見ても、ガウスには不思議で仕方がなかつた。

鈍い光を発する、太い金属が体内で甲冑に合わせて形成されており、それに細い管のような金属が巻きついている。まるでそれらは、人間の骨と筋肉のようであった。その為、それぞれ鋼骨、鋼筋と呼ばれている。事実、鋼骨は極度の剛性をもつ金属で、多少の衝撃では決して曲がらない。そして鋼筋は対称的に強い軟性と弾性を持ち、これが伸縮することで全身を動かす。鋼筋は中の素体、と呼ばれる液体による油圧で動く。

しかし、肋の奥には、搭乗席となる部分が埋まつており、それもまた生物的な体内には、異質な存在であつた。

副長が指示をすると男たちが、大きな槌で甲冑のひどくへこんだ部分を叩き始めた。あまりにへこんでいると、そこで鋼筋を圧迫しその運動を阻害する。その為、こうして板金作業のように治すことは決して珍しい光景ではない。しかし、あまりこれを繰り返すと、金属が疲弊してしまう為、その場合は交換を要する。つまり、応急

措置なのだ。突き立つた矢も、後々で引き抜くのかもしれない。

「団長、お田覓めになりましたか」

副長がこちらに気づき声をかけてくる。顔色が、少し青みがかっている気がした。

「ほかの騎士達は？」

「皆、教会へ赴きました。もう直に殉職した騎士達が埋葬される時間になりますので」

ガウスはそれを聞いて、自身も教会へ向かった。

話のとおり、騎士達が居りそこで祈り、そして、殉教した騎士達の全身を白いマントで包んでいた。棺はない。このまま地中に埋めれば、やがて地へと還るのだ。

「では、このあたりに埋めましょう。町から人を呼び、いそいで掘らせます」

司祭はそういうと、侍者に命令し町へと走らせた。その間、殉教した騎士達と親しかつた者は、その死体に咳きかけていた。別れを告げる者も居れば、親しげに思い出話にふける騎士も居た。

だが、ガウスは団長としての任務があつた。首都への連絡の書状を設え、兵糧を集めなければならない。そして、それ以上に騎士が足りなかつた。

白禽騎士団は聖戦に選ばれた、まさしく精銳とも言える騎士たちなのだ。並の騎士達以上の働きを見せるはずだ、とガウスは断言できる。だが、敵は大陸の東側に広大な国土を持つ王国だ。基より寡兵で立ち向かわなければならないのに、その数を賊徒の不意打ちによつてさらに減らされてしまった。ガウスは自分のふがいなさを悔いた。

司祭の侍者が、屈強な体つきの男達を連れてきた。その内の数人はこちらを睨むような目つきで見つめていた。だが、皆一様にガウスの方には決して目を合わせようとしない。自分より弱い、と感じるものとしか、この男達は目を合わせようとしないのだ。

男たちが作業を始めてすこしし、ガウスが任務の為他の騎士より

早く、その場から去つた。

道を歩くとガウスは周りの人間より頭一つ出でおり、純白に金の刺繡を施した服装も相まって遠目からでも非常に目立つた。

兵糧を仕入れようと、町の食糧を扱う店を回るも、やはりそう簡単には兵糧は集まらなかつた。聖戦の間の兵糧は、先行する歩兵や騎馬隊と共に進軍している輜重隊が担当している。先行しているのは騎神を扱う騎士団とでは、あまりに行軍速度に差が出てしまうからだ。しかし、輜重隊の兵糧はあくまで戦地やそこに赴くまで食するためのものであつて、騎士団のそれまでの兵糧は各自で用意する。まず全騎士団が神国内陸部にあるサイバスと呼ばれる土地で合流するのだが、騎士団が到着するまでが五日だとしても、輜重隊を連れた歩兵隊に追いつくのは街道を十分に使い、どんなに早くともその半月後になる。他の騎士団から受けようにも、どの騎士団も自分達の分の食糧だけで精一杯のはずだ。余分な荷は足枷にしかならない。事実、ガウス達白禽騎士団がそうだった。

さらに、兵糧はそれまでの神国の蓄えで、足りなければ全国からかき集められる。その為、神民も聖戦の時はあまり余裕がないのだ。それを一日で集めようなどというのはやはり無理であった。

一月分では少なくとも一週はかかる、とその商人に言われた。それでも、予想より随分と早い。ガウスはその商人と契約し、兵糧を手に入れることにした。サックが足りなくとも、量はそう多くない。最悪騎神に分散して積んで運べばいい。そうせざるを得ないのだ。

本来、このようなことは副長以下の団員にやらせればよいことだ。しかし、あえてそれをするのは、おそらくあのまま埋葬に立ち会うと、自責に駆られ押しつぶされてしまいそうになるからかもしれない。

半ばあきらめて、教会へと戻ろうとした時だった。一人の男に、目が付いた。

体は小さく、濃緑色のマントで全身を包んでいるためにわからぬが、あまり体躯は逞しくはないように思われる。そして、何より

も目についたのは、砂色をした無機的な仮面が鼻先から額までを全て覆っていることだ。

頭髪も砂色で、仮面はそれに溶け込んでいるようにも見えた。耳を澄ませば、腰から鞘に入れられた刀剣がなるような音がした。

おい、とガウスはその男を呼び止めた。近づくと、ガウスの胸のやや下のあたりまでしか、その男の背丈はなかつた。

「どうかしたか、騎士殿」

男が言つた。いや、声から察するにまだ若い、十六、七位のようにガウスは感じた。おそらく、それに間違はないだろう。

「もしや、傭兵か？」

「ああ、そうだが。それがどうかしたか？」

ガウスの巨体にたじろぎもせず、その傭兵は言つた。

「騎神は使えるか？」

「……使える」

その言葉に、ガウスは少しばかり悩んだ。この男を雇えば、人員の問題は解決する。今は、一本の藁にも縋りたい気分なのだ。しかし、傭兵に実力が伴わなければ、むしろ隊の足を引っ張ることになりかねない。そしてそれ以上に、どのような人物かもわからない者を、受け入れることは出来ない。全体の連携を乱すのは、何も実力だけではない。

「少し、話をしないか」

ガウスがそういうと、傭兵が小さくうなずいた。目元に保護透殻をはめ込まれた、瞳が見えない仮面が動くのが、まるで物と話しているようで、少しばかり不気味に感じた。保護透殻とは、騎神の目を守るものでガラスのように透明で堅く、しかし軽い甲殻のようなもので、白いものは存在せず、必ず赤や青などの色を帯びている。

「酒場が少し向こうにあつたはずだ。そこが良い」

傭兵が来た道の方を、ガウスが向かう方向を指さし言つた。ガウスもそれに応じる。

道中で軽く会話をした。傭兵は既に五年以上も、この仕事にその

身を賣していりと。いわゆる特權階級で戦がないときも、国から碌を受けることができる騎士と違い、実力と運がなければ、戦場で死に、もし生き延びたとしても働きが悪ければ次の機会に雇つてもらえる保証はない。傭兵として生き続けるのは、非常に厳しいことだ。

「何故、いつまでも傭兵でいる。その若さならば、他に仕事があるのでは」

「これが一番、性に合つ。土掘つたり、岩運んだりするより、戦場で刀振つていい方が。まあ、あまり理解はされないが」と口端を吊り上げて、自嘲を含んだように傭兵は言う。それを見たガウスは、ふと友のこと思い出した。あいつも似たようなところがある。今度二人を合わせたら、お互いに、どのような反応を示すのだろう、と想像しガウスは内心ほくそ笑んだ。

仮面については、触れる事はなかった。触れてはいけない、とガウスは直感したからだ。

教会の辺りに着くと、もう既に騎士達は誰一人としてその場にはいなかつた。副長には、騎士達を町の外で調練をさせるよう命令を出していた。このような事態だからこそ、身体を鈍らせるわけにはいかないので。

何があつたのか、と傭兵が尋ねてきた。昨夜のことを見つとその殉職した騎士達の事を聞いてきた。

「そこに今朝埋めた」

「墓標は……無いのか」

昨晚の夜襲はあまりにも急な出来事であり、そのような準備などできるはずもなかつたのだ。それに、戦で死んだ兵の死体を国へと送る余裕もあまりなく、高位やそれに近しい者以外の神国の騎士や兵は、神軍の墓地にある慰靈碑に名前が刻まれるだけでありもどり、自分の墓はないものとして、考えねばならないよう言われている。

遺族の中には、その体の一部でも良いから持つてきてほしい、と

いう人間も居たが、それは死んだ肉体に対する侮辱である、と主の教えにある。主曰く、死後の肉体は地や海に還し次の命を育む、高貴なものだと言っている。それを切り刻むなど、論外だった。

しかし、今回はあの寂しい草原意外に埋める場所が見つかっただけ、まだ騎士達は幸せなのかもしれない。ガウスがそういうと、「どうか」

「ところで、名前を聞いていなかつたな。何というのだ

「ケイ、さ」

「私はガウスだ、よろしく頼む」

「白鶩ガウスか。なるほどな。あなたの弓の話はよく聞く。長弓で半里（約二五〇メートル）先まで届くと聞いた。騎神なら倍とも聞く。今度見てみたいな」

傭兵は明らかな東鈍りの言葉づかいをした。里、という距離を表すであろう単位も、ガウスは分からぬ。だが、褒められているのだけは分かり、少しばかり照れた。

酒場に着く。そこで、少々の酒とケイは少しばかり肉を頼む。

やがてそれらが運ばれてくると、硬くなるまで焼いた肉の一切れを熱がりながらケイは思い切り頬張る。噛むと濃い肉汁が口に広がる。舌の上をまるで舐めるように、肉汁が染み出し、肉にかかるといふタレもところみがあり程よく甘く、それを長い時間をかけて咀嚼していく。肉をとるケイの手は止まらない。

神国では肉を頻繁に食すことを禁じられている。特に卵を産む鶏や神に洗礼を受けたとされる牛は、余程の時以外は食すことではなく、年に数度口にするだけだ。ガウスは欲を抑え、教えを尊守し、酒を少しづつ口に含んでいった。

それから、少しづつ話をした。以外にも、ケイはガウスが思つていたような粗暴な傭兵とは異なり、多少は礼節をわきまえていた。言葉づかいは敬語をあまり使わず、あくまで対等である、と言った。しかし、その内容には決して自虐も嘲りもなく率直で、会話は気持ちのいいものだつた。司祭のように妙に恭しくふるまう

ような人間とは違う、こういう人間の方がガウスは信用できた。

他愛のない話から、戦場での出来事、そして、女の話にまで広く話した。女の話を振られたとき、ガウスは思わずたじろいだ。惚れたことも、抱いたこともないからである。

「俺も、娼婦を何度も抱いただけだ。惚れた女は、一度も無いな……」

ふと、仮面の向こうでは、ケイがどこか遠くを見つめるような眼をしているような気がした。

酒場から変える道中で、ケイは一度鍛冶屋へと足を運ぶと何かを携えて戻ってきた。一本の剣だった。

「何に使うんだ？」

「まあ、さっきの墓場で、少しな」

ケイはそれ以上語らなかつた。ガウスも無意味な詮索はしなかつた。教会まで行けば分かるのだ。

騎士たちの眠っている場所につくとケイは鞘を払つと、まだ真新しいその剣先を地面に突き刺した。

ガウスが突き立つたその剣を見て、その意味を理解する。

「俺たち傭兵はこうやって死んだ奴を弔つているんだ。あんたらとは違つて、慰靈碑なんて用意されないし、名前もすぐに忘れられちまう。だからせめて墓標代わりにも、と、俺たちは戦場でこうやって弔う」

ケイは、そういうと一度小さく溜息をつき、寂しそうな声色で、「もつとも、次の日辺りには、そんなこと構いもしない奴に、剣は奪われちまつ」

剣とは、騎士のいや戦士の体の一部であり魂であり、誇りである。その為、肌身離さず持つように言われている。奪われる事は最大の恥とも言われているほどだ。それと共に地に還る、というのは、徹底した利己主義で殺伐とした戦場に生きている傭兵達には、少しばかり幻想的で不似合な気がした。

だが、悪くはない。ガウスはそう心の中で呟いた。

第一章 第一部（後書き）

今現在一話書を書いておつますが、いつになるかわかりません。可能な限り早く書きますので、どうぞよろしくお願いします。

第一章 第一部（前書き）

全開投稿した物を、友人の勧めにより分割したものです。

第一章 第一部

ケイを加えての調練は今日で二日目だった。

搭乗者の殉職した無傷の騎神を一体、ケイに貸した。自分の騎を持つていないためだ。自身の騎を持っているのは、騎士ぐらいのもので、それを持っている人間は極僅かでしかない。それほどまでに維持には金がかかる。傭兵で、持っている者も居る、と言うが、やはりそれは数えるほどしかいないだろう。

しかし、その技術は騎士達にも後れを取ることなく、調練にもついてきた。武器はガウスと同じく雑種剣を好んで使っていた。両手でも片手でも扱うことのできる剣だ。

はじめは傭兵というだけで、団の中に露骨に不快な表情を浮かべる者が居たが、特に問題を起こすことではなく、ガウスは内心安堵した。しかし、他の騎士達との交流をしている様子あまり見受けられなかつた。あのどこか不気味に思える仮面が、その原因なのかもしない。

三日前、飛脚に運ばせた書状には夜襲と被害の詳細な記述。そしてケイを自費で雇うことを明記した。自費ならば、多少とやかく言われようとも、承認される、とガウスが踏んだからだ。

飛脚には書状と共に、少量の銀を直接握らせた。

飛脚の多くは、まじめに書状をもつていかずその道中で副業、要するに寄り道をする。飛脚自体の給料は別段高い給料というわけでなく、副業をしなければ、当人たち曰く、割に合わないからそうだ。かといって、他に頼れるものないので、急ぎの書状を依頼する時は、寄り道をしないようこのように個人的に銀を握らせることが、ある意味当たり前となってしまった。ここから首都サンテルニアへの道のりはおよそ六百キロ。これならば、馬を使えばおよそ一週で到着する。

調練を終え、騎士達を並ばせたガウスは、彼らに一、二言葉を掛

けると騎士団全員である場所へ向かつた。行先はロイド内にある、他の民家に比べ少しばかり広い家だった。窓からほのかに明りが漏れていった。

騎士の一人が、扉を勢いよく蹴破る。中にいた男が、こちらを見て顔をひきつらせた。そして次の瞬間には、首が宙を舞っていた。意思を失くした身体は血を吹きだしながら、ゆっくりと地に吸い込まれていった。

「主に背く邪教徒共、覚悟しろ」

金眼を光らせたガウスが鞘を払い叫ぶと、騎士達がなだれ込み、次々と剣を奮う。邪教徒と呼ばれた彼らも武器を手にし、必死に抵抗をするが虚しく、騎士達の白刃の前に倒れて、首を刎ねられて行つた。老いも若きも、男も女も、そこに居た騎士以外の人間を問答無用で騎士は断ち切つた。

すべてが終わつた後には、広い屋内が全て鮮血で穢され、生臭い匂いで建物の中が充満していた。ガウスが顔を布で拭うと、赤黒い血で染まつた。物音がし、ふと視線を移すとケイが、その死骸の中から小さな本を拾い、貞を捲つていた。

「読めるのか？」

「いや。だが西側の言葉に似ている気がする。しかし、見たこともない言葉もいくつかあるな、方言かそれとも何かの名前か……」

「氣をつけろよ。それは奴らが信仰する邪惡の書だ、魂を穢されるぞ」

ケイはそれを聞くと、口端を吊り上げた。そしてその本を無造作に床に放ると、貞が血を吸つてみる赤くなる。ガウスは、未だに仮面の下のケイの表情を完璧に読むことが出来ないでいた。表紙が血で濡れていたらしく、手に着いたそれを拭いながらケイが見回すと、

「……随分と派手にやつたな」

「ああ。しかし、これでこの地に巢食う邪教徒を一掃できた。これでこの町も安心だろう」

「これからどうするんだ？」

「この家を焼く。そしてこの地を浄化せねばならない」

神国では火や水、鉄や土は太古より聖なるものとして扱われている。これを用いて、罪人の判決を下すこともある。邪教徒も、ガウス達白禽騎士団の穢れなき鋼刃に斬られることで、その肉体が净化されたはずだ。魂は、天で主が清めるだろう。

家に油を撒き、火を放つとみるみる炎は燃え盛り、家を呑み込んでいった。少し遠くから見ていたガウス達だが、炎の熱気がここまで頬を撫でた。

そこから、肉を焼くにおいが漂っていた。司祭のアロウが祈りをさげていた。それは、家が完全に焼けきるまで続けられた。それが終わると、アロウが恭しくガウスに声をかける。

「申し訳ありません。聖戦に赴く騎士殿にこのようなことを」

「いえ。邪教を討つのは我ら騎士の役目です。それに主の為にこうして働くのも、我らの刃で穢れた魂を正すのも騎士にとつては本望であります。どうぞそのように気にしないでください」

それを聞くとアロウは深々と頭を下げた。やはり、言葉の奥底で何かを隠している気が、ガウスにはした。

その後は、何事もなかつたように食事をとった。

ここにいる間だけでも、という司祭の言葉で、食事だけは教会でしている。質素なものばかりだが、文句を言つ騎士は一人も居ない。兵糧には適さないものが多いため、これを代わりに、というのはもちろん無理であるし、そんな無恥な真似をする気にはならない。食事をする場所はあまり広くはないため、全員入ることは出来るが、時折隣の騎士と肘がぶつかりそうになる。

教会に着き、食べ物を受け取ると感謝の言葉を述べ、祈りをささげる。その後パンやスープを口に運んでいく。そこにケイの姿はない。

ガウスがスープを含むと、隣の司祭から声を掛けられた。

「あの傭兵は何処にいますか？」

「外で何か適當なものを食べているだろ?」

「そうですか。ようやく自分の立場をわきまえたのですね」

田を細めて司祭は笑った。この男が特に、ケイのことを毛嫌いしている。一度、他の騎士達と同時に食事をとろうとした時、司祭は嫌味をしつこくつぶやき、ガウスは不快に思った。ケイはそれを申し訳なく思ったのか、その時から、一人で食事をとるようになった。「私は今でも、傭兵を組み込むことは反対ですよ。傭兵は金に尾を振る犬と同じです。いつ、我々の手を噛むかわかりません。主の遣わした騎神に載せるなど、考えられません。あのよつな者共は巨鎧にでも乗っていればよいのです。それだけでなく、聖地奪還の聖戦に、あのよつな穢れた無法者を連れて行こうというのは、司教殿や主があ許しになるかどうか」

神国の人達の言う主とは、いわば唯一神である。

神国では、神の、主の教えに最も忠実とされる司教達が、政治や経済、司法、外交などの政を行う。子供たちは幼いころより、神の言葉を学び、徳や仁のある大人へと育つ。初めの神国は大陸の西側の内陸部に位置した国であったが、今では国土も拡張り海にも面し、鉱脈もいくつか有している。

そして、ガウスが生まれるはるか昔から、この聖戦は始まった。

聖地は大陸の東側に位置し、現在は王国が領地としている。主の恩を忘れ無礼を働き、無法に蹂躪する背信者、不届きもの共からガウスら神国の民はこの地を奪還しなければならない。我らが主、神のために。

しかし、司祭の言葉にガウスはどこか苛立ちを覚えた。現実を見ていないので。確かに傭兵などを組み入れることは、あまり是とされてはいないが、騎士が四人殉職してしまった今はいわゆる緊急事態なのだ。ただでさえ強力な王国軍を相手にするのだから、少しでも多くの兵力が必要なのだ。その為に、最低限、騎士団として機能させるためにケイは必要なのだ。少なくとも、今現在は。

ガウスは苛立ちを悟られないように、寡黙に食事を進めていたが

おそらく氣づかれたかもしない。自分の眉間に皺が寄っているのがよく分かった。食事中、自分に話しかけてくる者はそれから一人も居なかつた。

草原でケイが居合のよう構えていた。太刀は剣とは違い、片刃で反りが強く刃が厚い大陸の東側の極一部の地域で製造される武具だ。ケイが佩いている小太刀はその特徴を持ち、さらに長さがとても短いもので、抜刀が速く、片手で扱うことが出来る。

構えていると、肌が緊張する。体の芯から引き締まり、血が滾る。五感が研ぎ澄まされ、手先に気が集まる感触がよく分かる。そして、溜めこんだ氣が爆ぜ、敵を断ち斬るのだ。

草を踏みしめる音が聞こえ、そちらの方を向くとホールがこちらを見つめている。

「晩御飯です。ガウス様が」

「悪いな。わざわざ運ばせて」「いえ」

ケイはパンを受け取ると、腰の袋から何かを取り出した。干した果実のようだつた。ホールに差し出すと、

「食べるか」

ホールは少し悩むも小さくうなずくと、受け取りそれに齧り付く。表面に糖が塗してあるらしく、それはとても甘くホールは頬を紅潮させ、年相応の明るい表情でそれをかじつしていく。その様子はまるで子犬のようだつた。ケイに、「面いか」と尋ねられるとホールは大きくうなずき返事をした。

「そうか。なんだか、変にかしこまつて見えたんでな。堅苦しいから、俺だけの時くらいは、気を抜いてくれ」

ホールはそれを食べ終わると、思わず指についた糖も綺麗に舐め取つてしまつた。ガウスが居たら窘められてしまうだろう。あまり大きくなればずなのだが、中々食べ応えがあった。ホールがケイの顔を一瞥すると、黙々とパンを口に運んでいた。ケイはすぐに食べ

終わると、手を叩き、粉を払った。

「歳はいくつになる」

「もうすぐ十になります」

「騎神は、もう動かしたのか」

「いえ。ガウス様は十二になつたら教えてくれると、仰つてました。
それまでは剣の稽古だけだとも」

「……さつきの異教徒狩りについて、どう思う?」

「エールは少し戸惑いながらも、小さく、怖かつた、と呟いた。
「たくさんの人人が死んでいて、とても怖かつたです。少し前も、人
が死んでいるのを見たのですが、やはり慣れません。しかしこれは
主の為に騎士がしなければならないことだと、ガウス様は仰つてま
した。ですから、その」

エールが言葉を詰まらせると、ケイは、

「……そうか。まあ無理だけはするな」

エールの頭を撫でた。指先に柔らかい、滑らかな金髪がよく絡み
心地よい。本当は気の利いた言葉の一つもかけてやろうと思つて口
を開いたのだが思ったように出ず、ケイは口端を釣り上げた。

ふと、視線を移すと騎士達が帰つてきているのが分かつた。ガウ
スの巨体は、傍から見ていても目立ち、すぐにわかる。エールは素
早く立ち上がると、こちらに一度頭を下げ、駆けて行つた。

ケイは一度横たわる。さすがに、少々のパンだけでは腹は膨れなかつた。先ほどエールにあげたものと同じものをゆっくりと咀嚼しながら食べた。合間に少しづつ水も口に含んだ。それでようやく、腹が膨れた。その様子を見ていたガウスが声をかけてくる。

「済まない。満足に食事も出せずに」

「気にするな。俺一人のために、他の騎士達の気を削ぐ必要はない」

「しかし、どのような事情があろうとそこまで露骨に態度に表わ
すとはな。よりもよって、司祭であるアロウ殿が特に酷い。今日
など、傭兵達のことを犬呼ばわりしていた、全く聞いているこちら
が恥ずかしい」

「アロウ殿でもやはり人の子さ。仕方ない」

笑つたようにそういうと、ケイは焚火に薪を投げ入れる。火の粉を散らして炎は揺らめいた。二人は暫し、その様子を眺めていた。

「今日は雨が降りそうだ。騎神の中で寝たほうが良いな」

空を見て、ガウスがそう呟いた。その視線の先を見ると、確かに厚い雲が見てとれた。風も吹き始めてきたようで、耳を澄ませば遠くで鳴つている音が確かに聞こえる。

「そのようだな」

すると、後ろの方でガウスを呼ぶ声がした。ガウスは立ち上がり、少しばかり躊躇いながらもそちらの方へと向かう。ケイはその背中を見送ると、ゆっくりと立ち上がった。

突風が駆け抜けた。すると、傭兵を包むマントはまるで、燃えかかる炎のように、大きく靡いた。

それから傭兵は一人、町への道をゆっくりと歩いた。

マントの下では、腰の小太刀に常に片手をふれさせた。掌が汗で滲んだ。教会の前に着くと、衣服で掌の汗をぬぐう。

頬を雨粒が打つた。火蓋を切つたように、雨が降り始め、傭兵は走つた。

教会の中からほのかに灯が見えた。重い扉を押し開ける。すると祭壇の前に居たアロウと従者がこちらを向いた。慌てて身に着けている衣類を直している。

アロウに用を聞かれると、

「いえ。用というほどではありませんが、言伝をお願いしたくあります。その、あなた方の神に」

とだけ告げた。傭兵には珍しく、いやに恭しい態度であった。アロウが少しばかり怪訝そうな表情を浮かべると、傭兵は懐から小さな袋を取り出した。耳を澄ますとそこからは、金属同士がこする音が聞こえた。

「少し下がつていろ」

アロウが隣にいた従者を下させた。素直に従者はその言葉に従

い教会から出て行つた。扉が閉まり従者が完全にいなくなつたのを確認すると、司祭は顔をにやつかせた。

「なるほどな。傭兵といえども、やはり主に縋るか。だが、お前のようにきちんと誠意を見せるものには主は寛容だ。安心するがいい。噂通り、アロウは傭兵から金を取ることに何の抵抗も見せなかつた。本来はそのようなことは重罪なのだが、首都から監査が入るわけでもない。

教会は首都からの援助と寄付で成り立つてゐる。しかし、それだけでは飽き足らず、アロウをはじめとする司祭の一部は自身が治める土地の人間からの賄賂を平然と受け取り、代わりにその人間に得になるようなことをする。そうすることで、自身の懐を温めている。

アロウがこちらにゆっくりと歩み寄ると、傭兵の手にあるその小さな袋に手を伸ばす。

その時、薄暗い闇の中、白銀が一閃した。傭兵の左手には逆手に小太刀が握られている。それを認めた時アロウの首から、血があふれ出した。喉は見事に横一文字に斬られていた。

口から泡を含んだ血を吐き出しながら、アロウはまるで縋るよう手を伸ばし、傭兵の面を掴んだ。ずれた面から傭兵の眼を見たアロウは、目を剥き、唇を動かすも、声にはならずそのまま倒れた。

アロウは弱弱しく、風が鳴るような呼吸をしながら、傭兵を見つめる。傭兵の眼はただ、こちらを見つめるだけだ。その奥に何を秘めているのか、分からなかつた。そして、アロウはこと切れた。

傭兵は小太刀を右手に持ち帰ると、そのまま既に死亡したアロウの腹に深く突き立てた。そして小太刀を動かし、腹を引き裂き始めた。

砂色の水滴が傭兵の頬を伝い、頬に着いた血と混ざつた。

ガウスは雨の中を駆け抜けた。背後には、数人の騎士を引き連れている。

従者が慌てた表情で伝えに来たのだ。アロウから下がるよう言わ

れた後、何か大きな物音が聞こえたのでこつそりと様子を見ると、ケイがアロウに何かをしていた、というのだ。問題なのは、その片手に小太刀を握っていたことだ。

ケイがなぜそこにいたのか、考へても、ガウスにはわからなかつた。しかし、小太刀を抜いたのだ。何事もないはずがない。

雨粒が目に入る。目を細めながらもガウスは滲む視界で走り続けた。

教会の扉をくぐると、生臭い悪臭が鼻を突いた。奥まで進むと、背後の騎士はその臭いに耐え切れず吐瀉したようだ。雨音に混じつて、その音が聞こえた。遠くから確認できる限りでは、アロウは喉と腹を斬り付けられていた。闇の中、白い装束はよく目立ち、腹と首回りが赤く染まつっていた。

ほかの騎士達がたじろぐ中、ガウスはゆっくりとそれに近づいた。金眼を凝らし、斬り付けられた腹の傷をよく見る。傷はとても深く、知識のないガウスでも、腹の中の臓腑がかなりの傷を負っているのが分かつた。悪臭もそこから漂つ。搔き混ぜられたかのよつな、傷のつけ方だった。

明らかに致命傷であつた。喉の傷もまた然りだ。しかし、なぜ両方をするのかが、ガウスには理解できなかつた。このどちらかだけでも、数分としないうちにアロウは死亡したはずだ。とどめを刺す、というのとはまた別である。恨みがあるのとも違う。その場合は相手の顔を切り刻むことが多いという。だが、どちらも傷は一つだけだ。

ガウスが考へ込んでいたその時、

「まるで黒狼だ……」

ガウスの後ろの騎士が、それを見てそうつぶやいた。騎士達の肌がひりついた。

黒狼とは、聖書に出てくる魔物だ。主の喉を切り裂いて殺し、腹から臓物を引き擦り出して貪つたといわれる残虐非道の魔物。普段は人間の姿をしており、両の眼と頭髪が黒いらしい。しかし、その

魔物はその後、主の怒りによる天からの落雷に打たれ焼け死んだはずだ。

騎士達は明らかに動搖を隠せていなかつた。ガウスが視線を上げる。

「騎神に搭乗だ。黒狼を討つ」

それを聞くと、騎士達は即座にその場から離れる。ガウスはアロウの目の前で、一礼をし、マントを被せてそれから背を向けた。純白のマントは、生き物のようにその血を吸い、悍ましい朱色を帯びた。

野営地に戻るとすぐさま命令を下す。やはり、ケイの姿は見えなかつた。

命令を聞くと、一部を除いた騎士達はすぐさま騎神の搭乗席にあるプレーートアーマーを着込む。

プレーートアーマーは兜と肩当て、鎧、脛当てだけで、甲冑と呼ぶにはあまりに不完全すぎた。薄闇の中、目を凝らすと天井から伸びる太い管のようなものがそれぞれに繋がっているのが分かる。

搭乗席の両脇にある穴のようなものに騎士達は腕を突っ込む。

すると穴の中で腕が冷たい金属に肘から指先まで、巻き付き、締め付けられる。両腕を引き抜くと籠手が巻きつき、やはり太い管が穴の奥から籠手に繋がっていた。身に着けていた甲冑のほかの部分が、小手と同様に締め付けられた。右の籠手をわずかにあげると、胸のハツチが閉じる。

右腕をねじると騎神の頭部、保護透殻の奥で確かに、騎神が目を覚ました。

兜から脳に直接視聴覚情報が送られる。騎士達は騎神の手足がまるで自分の一部に脳が誤解する、幻肢症に似た錯覚を覚えた。この感覚に慣れていない者は、半時も騎神操ることが出来ない。全身が拒絶するのだ。さらに操縦の難しさや、その絶対数の少なさから騎神操ることが出来るのは、神国の騎士だけであった。

さらに籠手を操作すると、腕に僅かな抵抗を感じると共に、鋼筋は

油圧で伸縮し、巨体を立ち上がらせる。全長は、十五ウォルト（約六メートル）はあった。

騎士はまるで騎神の心臓であり、中枢神経であり、脳であった。マントを広げると胸には白く輝く猛禽の紋章が小さく刻まれている。これが騎神だ。

「出撃」

ガウスの怒号が響く。闇夜に包まれた白禽が今、翼を開く。

第一章 第一部（後書き）

同様に、三、四もすぐに投稿します。

雨脚が強くなっていた。月が隠れたことで、視界は不鮮明で搜索は困難を極めた。

ガウスは騎士団を三つに分け、守衛の兵と共にそれぞれ町の中と森を東西一二手に分かれて搜索を開始した。

ガウスは森の中を探した。逃げるにしても隠れて時を稼ぐにしても、やはり森が一番適している、と考えたからだ。その中で、東を選んだのはただの勘だった。

しかし、木々をかき分け泥を踏みしめながら探すも、やはり木々その姿を見つけることが出来なかつた。

ガウスの騎神、白禽は暗視機能を使うことで、他の騎神よりも視界は鮮明なのが、それでも見つけることは難しい。直に目は闇になれるだろうが、この雨模様だ。やはり、視界は滲んでいるだろう。しかし、この雨の中だ。ケイは、黒狼はどこかに隠れているはずだ。騎神を動員したのは、ケイが巨鎧を所持している可能性があつたからだ。たとえ、そうでなかつたとしても、万全を期すのが得策だ。

騎神同士の距離が徐々に開いていく。広い範囲を探そうとすれば致し方ないことだつた。騎神同士による发声を用いた通信を、短い間隔で交わすことで何とか状況を知ることが出来た。やはり、搜索は芳しくないらしい。

目を凝らし、耳を澄ませても、眼前にあるのは木ばかりで、聞こえるのは強い雨音と、騎神が木を揺らす音だけだ。時折、騎神の足が深く泥に沈み込み、うまく歩くことが出来ない。

本当にケイが黒狼だというのか。ガウスは後悔を抱いたままであつた。僅かな間だつたが、決してそのような疑惑を抱かせなかつた。しかし、もし黒狼だとするならば、それを、三日もありながら見抜けなかつた自分のこの眼はただの節穴だ。騎士達の間で白禽と呼ばれ、胡坐をかけていたのだ。

ただ、唯一挽回する機会があるとするならば、今、ここで黒狼を討ち取る事だつ。

数度目の通信を交わした時、異変が起きた。声が、途切れたのだ。ガウスは駆けた。だが、次々と奇襲を告げる声が連なる。おそらく黒狼は、一撃離脱を繰り返しているに違いない。現在聞こえるのは五、そして二が奇襲を告げたのち声が途絶えた。生き残った五人も奇襲を恐れるあまり、恐怖や激昂で冷静さを失っているように思えた。これが、ただの賊徒や他の軍の一兵ならいざ知らず、黒狼だ。やはりそれの及ぼす心理的作用は尋常ではない。次、奇襲を受ければその拾つた命を捨てかねない。これ以上失う事だけは避けたい。その為、奇襲を受けた騎士はそのまま帰還させた。

そして、また新たな奇襲を告げる声が聞こえた。距離は近い。ガウスは白禽を走らせる。

視界の向こうで黒い巨鎧が、銀牙を振りかざしていた。次の瞬間、それは足元に這つている騎神の胸の深くまで潜り、引き裂いた。

ガウスが無意識に唇を噛むと、黒い巨鎧がこちらを向いた。姿は分からぬ。だが、その眼は、まさしく獣だった。間違いなく黒狼だ。ガウスは身震いをした。

白禽の手に持つた剣をもう一度、強く、だが確かに握り直させた。雨粒が、刃を覆つた。

闘気が空気を斬り、迫る。

二体の刃が交わり火花が散る。鉄の重厚音が森を揺らす。黒狼は暗視機能を使用していても、外形がぼんやりとわかる程度だ。あまり体格は太くない。

鍔迫り合い。力ではこちらが勝るはずだ。ガウスは籠手を付けた右腕を力強く押し返す。両脚の鋼筋はその中に素体が素早く流し込まれ、力強く伸びた。

白禽は地面を蹴り、押し出そうとしたが、黒狼が横へと跳ぶことでそれを流した。

わずかな沈黙も、激しい雨脚にかき消されていた。甲冑を雨粒が

強く打つ。

「何故俺に近づいた」

不意にガウスは問うていた。しかし、傭兵は沈黙。それだけで十分答えになっていた。怒り、切りかからうと踏み込んだ時だった。黒狼の左手から、何かが放たれ、白禽の太腿は爆発した。泥にも足を取りられ態勢が崩れた。

黒狼の小太刀が迫る。とっさに剣を上げて防ぐもそのまま地に膝をつく。直後何かに激しく胸を叩かれる。

紋章が歪む。暗視機能を使用していると、動体視力が落ちてしまい、黒狼の膝蹴りに反応できなかつた。そのまま後ろに倒れ込む。ガウスは全身を巨大な何かに掴まれ、振り回されたかのような衝撃に襲われた。だが、それに怯まず必死に白禽を操縦する。

追い打ちをかけようと黒狼が小太刀を振りかぶる。しかし、ガウスは左手を横に弾くことで白禽を転がさせ回避。即座に立ち上がりさせ態勢を立て直す。

ガウスは一度口で大きく息をした。そうすることによってやく冷静さを取り戻すことが出来た。あまりに条件が悪すぎる。いや、そうなるように仕組まれたのかもしれない。平原の様な所で遠くから『』さえ使えば、と考える。

ふいに雨脚が弱まつてくる。そのことをガウスは光明と考えた。剣を構え、両足でしつかりと立つ。固唾をのみ込んだ。

闇の中で小太刀が唸る音が聞こえる。それを弾くと互いの刃が火花を散らしながら高らかに吼え、腹の底まで響いた。しかし、ガウスは退かない。左籠手を前に、右籠手で裏拳を力強く振る。

二体の巨人が、鋼を纏つた鉄の肉体で闇の中を躍動する。刃が鉄を切り裂き、拳が鋼を打ち抜く。一合するたびに、鋼鉄が唸り、火花を散らし、轟音が空気を揺らし響かせた。

黒狼の攻撃にガウスは一瞬遅れる形で対処していた。攻撃が見えないのだ。小太刀を囮として、そこから手足を突き出してくる。それが非常に厄介だった。巨体が細い木をなぎ倒しながら、迫る。身体

全身についた傷からは素体が滲みだし、少しづつ力を奪つていった。そして、鍔迫り合いから強く押し出したとき、黒狼が大きく崩れた瞬間をガウスは見逃さなかつた。左手の指を弾き、右の拳で薙ぐ。

白禽は恐れずそのまま大きく一步飛び込み、横に斬りつけた。だが、振り切る前に黒狼が刃にぶつかってきた。そして、小太刀が地面から飛び上がるようにして一閃する。白禽は下腹部から首元まで真直ぐ斬り付けられた。素体が噴き出す。黒狼の左手は腰の鞘に伸びており、それでガウスの剣を防いでいた。

縦に一つに斬られた紋章に触ると、ガウスは唇を噛み、唸つた。ガウスがとっさに体をのけぞらせていなければ、命は危うかつたかもしれないなかつた。

戦いが巧い。ガウスは傭兵の駆る黒狼にそういう印象を抱いた。剣術と体術を組み合わせた戦い方だけでも並みの騎士達にそう劣りはない。やはり、五年以上傭兵を続けた、という話は偽りではなかつた。

それだけでなく、全身を黒く塗ることで闇夜にまぎれて襲いかかり、騎士達を討つている。剣術ばかりの騎士には、こういうことまで考えて戦うことは出来ない。

しかし、だからこそ、ここで討ち取らねばならなかつた。
それが、今の自分の役目だ、と思つた。

やがて雨がやみ、雲の切れ間から月の光が差し込む。刃が光を放ち、闇を断つ。

ガウスは暗視をやめ通常に切り替える。

雲は流れ、一騎を半月が照らす。互いに姿がはつきりと見えた。

全身を黒く塗装し、全体が角張り、まるで齧をそぎ落としたような太すぎない腕や脚、全身はまさに、黒狼と言つ名にふさわしかつた。

巨鎧や騎神の腕や脚の太さはそのまま筋力の強さに直結する。しかし、騎神た巨鎧の原動力は搭乗者の体温だ。腕を動かし、足で踏ん張る力を搭乗者から受け、それに対応する部位に、鎧を通して、受けた。

た体温を増加した熱で圧力を生みだし、それで全身の鋼筋を伸縮させる。つまり、太い腕や脚を激しく動かし続けるには、それだけ多くの熱が必要で、それを引き出すために搭乗者の全身にとてつもない負担を掛け続けなければならない、ということだ。細いことにも理由が存在する。

胸の素体は既に固まり、それ以上素体が溢れるのを防いでいた。

白禽は黒狼を突いた。小太刀に比べ距離の優位はこちらにある。黒狼は飛び退りかわそうとするも、背後の木々に遮られ、さらに泥に足を取られたらしく、うまく回避ができない。森の中、という状況がこちらにうまく働いた。反射的に黒狼は首を曲げるが、首筋の左側に剣先が刺さり、切り裂いた。素体が吹き出す。突き出された剣をつかもうと黒い手を伸ばすが、空をつかんでいた。

黒狼は、決して特別ではない。自分と同じ、実体のあるものだ。白禽は金眼を光らせながら白銀の剣を振り、剣に巻きつく粘り気のある素体を弾く。

傭兵は舌を打つ。兜を通して送られてきた情報では、傷は深い。人間でいえば頸動脈と筋肉を切られたようなものだ。自然と首が左に傾く。素体が凝固するまであまり派手な動きは出来なかつた。明らかに仕留め損ねた。白禽という渾名は決して伊達ではなかつた。今夜雨が降つたのは偶然だつた。雨は機を見計らう自分の背中を強く押し出し、今日のアロウ殺害を決行させた。そして、その後の騎士団相手の戦闘も元より闇にまぎれての奇襲しか、方法はないと思つていた。それにはこの雨は絶好の機だつたのだ。

だからこそ雨がやむまでが勝負だつた。地力では自身よりガウスの方が上手であることは解つっていた。それが余計に悔やまれた。

ガウスの咆哮が響いた。白禽の剣が風を切り、兜を叩き割らんとした。傭兵は左籠手を直接操縦に切り替え、腰へと伸ばす。黒狼もその動きをなぞり、鞘を掴みそれで防御する。すると剣は突如軌道が縦から横へと変わる。頭部を横から思い切り剣でたたきつけられ、黒狼の右目をつぶした。

傭兵は、ありもしないもう一つの右目に痛みとは違う違和感のようなものを覚えた。そもそも、もう一つの体というその感覚自体があくまで錯覚なのだ、痛みがあるはずがない。それがまた、不気味であった。

反射的に、傭兵は右籠手をひねるように操作する。黒狼は右手首のハツチから、騎神や巨鎧の指の半分ほどの長さの筒状の何かを地面にばらまいた。

右からの攻撃に対処ができなくなつた。とつさに左足を前に出し、半身状態になる。こちらからは出ることが出来ない。完全に受ける形となる。

一方、白禽も迎え撃つ構えだ。先の足元での爆発と黒狼の手元から出たものが気にかかり、地面を見ると、見慣れない小さな円筒状のものが散らばっている。

ガウスの知つている爆薬は全て粉末状のものであり、湿気にとっても弱く、扱いの非常に難しいもの、としか思つていなかつた。その為、雨天での爆発など全く考えられない事であつた。しかし、それを踏むと先ほどのように爆発する。それが、この黒狼の機能なのだ、ということだけはガウスにも予想ができた。僅かに残つた冷静さが、ガウスを踏みとどませた。

一騎はゆっくりと動いた。白禽が雷管をよけるのに合わせて、黒狼が動かされた形だ。

木の葉を伝つた雨粒が、静かに落ちる。

傭兵はあることを警戒していた。

白禽が後ろを向こうとすると、傭兵は黒狼をとつさに前に出す。撤退させた部隊を呼び戻されることだけは避けねばならない。巨体が駆け、枝が揺れた。

黒い左手が剣を持つ腕を掴もうとするも、その寸前で止まった。

黒狼の脇に鋭い剣先が刺さつていた。甲冑と甲冑の脆いわずかな隙間を白禽は見事に突き刺した。刺された剣が引き抜かれると、左腕は垂れて動かなくなり、脇からは素体が激しく流れ出す。

誘い、だつた。こちらの最も警戒することを読まれた。しかし、そのまま何もしなければ、間違なく呼ばれていただろう。自然と歯ぎしりをした。傭兵の左の籠手にかかつっていた僅かな抵抗も、すでに消え失せてしまった。

白禽に比べ黒狼の損傷は著しい。体中の小さな傷を除けば、白禽は胸の傷しか深手を負っていない。一方、黒狼は左腕と右目の機能を失い、このままでは斃すことはおろか、退くことすら叶わない。七体もの騎神と交戦した傭兵の息は、上がり切っていた。頭が、心臓が、締め付けられそうになる。限界は、そう遠くはないはずだ。ここで死ぬのか、ふと傭兵の頭の中をよぎった。何もせずにただ死ぬのか。それだけは許せなかつた。今迄生きてきたのは、決して生への執着からではない、ただ一つ、奴を斃すために生きてきた。この刃も拳も、そのために砥ぎ続けてきたのだ。ここで死ぬことは犬死でしかない。

「ふざけるな」

傭兵が静かにつぶやいた。血が、沸いた。

腰に小太刀を構える黒狼の全身から低く軋む音がした。全身をいつもより引き絞つてゐるからだ。それはまるで狼が牙を剥き出し、唸つてゐるように傭兵は聞こえた。

一体が対峙する。互いに動かず、機を待つ。ガウスの首筋は汗をかいてゐる。黒狼は気を放つてゐる。それが自分を圧迫するのだ。しかし、それに屈することはすなわち、敗北を意味する。そう断言できる。

白き猛禽が闇を覗き、その獲物に狙いを定める。対する黒き狼は地に伏せ、息をひそめながら獲物が降りるのを待つた。
互いに手負い。されど、その血未だ冷めず、その身退転を望まず、その爪牙決して折れず。故に獣は恐れを捨てた。

刹那、黒狼が吼え、小太刀が先に走つた。解き放たれた小太刀は通常より速く、長く感じられ、ガウスは不意を突かれた。鞘ごと振りぬいたのだ。牙が唸る。

白禽は飛んできた鞘を剣で跳ね上げる。すると、黒狼は鋭く一直線にこちらに向かつて飛び出してきた。返す手で小太刀を振るつ。

白禽は上げた剣を、勢いよく振り下ろす。

空中で一つの刃が交差し赤い火花を散らした。互いに痺れも痛みも感じぬ状態で、小太刀が黒狼の右手から引き剥がされ吹き飛ぶ。爪は牙をへし折つた。しかし直後、黒狼がその体勢から流れるように蹴りだしてきた。白禽がそれをなんとか防ぎ、しつかりと脚を掴んだ。片足で立つ黒狼のその足を、剣で難ぎ払おうとしたその時、掴んでいた脚に力が込められた。そう感じ取つた次の瞬間には、黒狼は跳んでいた。

まだ、牙は残つていた。

残つた右手で白禽の頭を掴むと、黒狼はそれに膝蹴りをする。白禽の顔の半分程がつぶれた。そのまま黒狼は、白禽の胸を蹴り、後ろへ跳んだ。その勢いで、脚を掴んでいた白禽の手が引き剥がされた。

砕けた保護透殻が飛び散り、月明かりの下、宝石のように輝いた。黒狼が地に着くと、つま先で撃鉄が音を立てて立ちあがり、鋭く雷管を叩く。雷管が爆発し、その勢いのまま拳を打ち出す。拳には何かがついている、ナックルダスター。拳を保護し、それによる打撃の威力を増す武器だ。

ガウスは僅かに残つた視野の隅でそれを確認した。だが、それに構わず一撃に全ての力を乗せ、剣を振るつた。それは本能に近かつた。

すると次の瞬間、二つの重音がほぼ同時に響いた。黒狼の拳が白禽の肩口を最短距離で打ち抜いた。すると、そこで爆発が起きたのだ。爆発が起きた所の甲冑は吹き飛び、まるでえぐり取られたかのような跡が出来、腕の鋼骨が剥き出しになつっていた。素体が、勢いよく噴き出す。

黒狼も白禽の刃が脇腹にめり込んでいた。素体が滲み、漏れ出した。そして、膝をつく。残つた右腕で何とか巨体を支えている、そう思

えた。

夜風が、走る。

互いに呼吸が激しく乱れ、騎も損傷が大きく、もう一合も剣を振るうことが出来なかつた。黒狼がゆっくりと立ち上ると、小太刀を拾い、去ろうとする。

満足に相手を捉えることも出来ないほど視力を失つた白禽の中から、ガウスは傭兵に問いかけた。

「貴様の目的はなんだ？」

「お前らの神に喧嘩を売りに來た」

黒狼が肩越しに答える。

「どうということだ……」

すると、黒狼は立ち止まりこちらを向く。ガウスは白禽を立たせ反射的に剣を構えさせたが違う。腹部のハッチを開き、傭兵が姿を現す。ガウスは右手の指を動かし、白禽の五つあるうちの真中の目に切り替える。すると、点のよつたその顔を何とかみることが出来た。背筋が凍る。

黒い髪と黒い二つの目。紛うことなき黒狼。なぜこの男が主に無謀にも挑むのかを、ガウスは理解することが出来た。そういう、宿命なのだ。

黒狼は静かに去つていいく。ガウスは追いかけることも出来ず、その背中を見つめ続けるだけだつた。

一体を優しく抱擁するように、生暖かい風が吹いた。だが、黒狼はそれを払つように、頭を一度煩わしそうに大きく振つた。

生まれた時から、髪と目は黒かつた。父も母も全く違つた、といふのに。いや、そもそも髪にしても目にしても黒い者など、どこにもいなかつた。少なくとも、自分の生まれ故郷では。

それでも父も母も自分を大切に愛し、育ててくれた。周囲の人間からも、奇異の目で見られることが多かつたが、避けられるようなことはなかつた。いつもほかの子供たちに混じつて、駆けまわつていた。あの日までは。

ある日、近所の子供たちと一緒に、駆けまわつていた。道は舗装されてない、土がむき出しの田舎だつたため、体中泥だらけにして笑つた。

遊び終え、疲れ切つた体を引きずりながら、自宅に着くと両親はいつも通りに迎えてくれた。そのまま眠りこけてしまいそうになっていると、突然何者かが家に押し寄せてきた。男たちは白銀の甲冑に身を包んでいた。何が起きているか理解できず、それを見つめていた。自分を見た男たちは険しい顔をしていた。直後、拳が飛びだしてきて体が真横に飛び、床に叩き付けられた。頸に力が入らず、耳の奥で何かが鳴り続けていた。すると男たちに取り囲まれ、すぐさま体に縄をかけられた。隣にいた父や母も同様に、だ。そして男たちが駆け出した。それからしばらくすると、自分の両親を含む十人ほどの大人たちが、同じように縄で縛られ連れてこられた。

白銀の甲冑を身にまとつた男たちに町から連行された。周囲の村人たちは何もしようとなかつた。皆一様におびえたような眼をしていました。

連れて行かれたのはどこかの牢獄のようだった。そこで手枷と足枷をハメられると、一人で閉じ込められ、泣いた。さびしくなり泣いた。

毎日その薄暗い牢の中で残飯にも劣るようなものを食べ、父と母

に思いを寄せた。

ある朝、兵士に土を掘る道具を持たされ、これを埋めろ、と命じられた。指さした先には死体が山積みとなっていた。よくよく見ると、体中にひどい仕打ちの跡が伺える。爪が剥がされた指は一本残らず、まっすぐにはなっておらず、身体には何かで焼いたような跡や貫いたような傷がはつきりと見受けられた。おそらく、拷問の果てにこと切れた人間なのだろう。

そして、父と母もそこにいた。

またも自分は泣いた。震えた鳴き声は空にむなしく散つていった。すると、兵士に腹をけり上げられ、催促された。反吐を吐き、涙を流しながら、小さな体で土砂を何日もかけて掘り起し、鳥が群れている死体をその中に埋めた。両親の顔が土に埋もれた時、涙はもうでなくなっていた。

それからも何年もこの獄で過ごした。ある時は塀に使うような重い立方形の石を背負つて運び、ある時は、延々と穴を掘つては埋めるような作業をさせられた。他にもさまざまことをやらされた。僅かに拷問を生き残つた、不具になつた大人の中には、作業の途中で気が狂い、兵士たちに処断されたものも少なくない。それを見ていて、これはただ苦痛を与えるためだけのものだと理解するのに、そう長い時間はかからなかつた。

食事は相変わらず残飯以下の代物で量も少なく、常に空腹との戦いだつた。おかげで現在体は絞られてはいるが、あまり大きくなれず、同年代の者にも見ぐびられることが少なくない。しかしたとえ腹が減つていようが、怪我や病気であろうが働かなければ、兵士に具足をつけた手足で殴られる。しかしそれで身体を痛めても仕事はさせられる。なので、黙々と続けた。死体は病魔に侵されていたものもあつため、口には出来なかつた。

そして、食事の前には朦朧とした意識の中、神国の司祭らしき男の話を聞かされた。彼らの神を信仰することで、自分たちの魂は清められ、罪を許されるのだといつ。事実、獄から出された者は例外

なく、傍から見れば盲信しているような人間だつた。死んでもここに埋められるだけで、この獄からは出られない。

つまり、あの苦痛は、自分たちの心を踏み慣らし、彼らの神が居座りやすくするためのものなのだ。

西側鈍りが分かり始めた頃、兵士に、なぜ自分がこのような仕打ちを受けるかを聞いた。すると、鉄の右手と蔑むような目つき。そして、

「主がそれを望むからだ」

と兵士は躊躇いもなく答えた。その時は何もわからなかつたが、今ならはつきりと解る。それ以降、兵士に口をきくことをやめた。神がなんだというのだ。神が居なくとも、いや、神が居なければ、誰もあのような惨い、形容しがたい苦痛の末、無残で屈辱的な死に方はしなかつたはずだ。

この眼が、この髪が、神に仇成す黒狼である証というのならば、なつてやろう。たとえ地を這い、泥を啜り、血肉貪ろうと。

その時自分の中で、赤黒く染まつた生臭い粘り氣のある羊水から何かが生まれ落ちたのを感じた。すると、身体の奥底から何かがこみ上げた。それはやがて叫びとなり、発せられた。慟哭や気合ではない。産声だ。泣き叫ぶ人間とは違う、獣の産声だ。

それからはただ生きて、逃げる機をつかがつた。無意味な作業に、自分で適当に意味をつけ、手段として行うことで、なんとか平静を保つていられた。正氣では勝てない、だが気がふれでは戦えないと思つたからだ。しかし、大人の多くはその行為自体に意味を、目的を見出そうとし、ある者は氣を悪い死に、またある者は神に縛つた。死体を埋めるのは例外なく自分の仕事だつた。だが、あの日から涙を流すことはなくなつた。

自分が十一位のある時、牢を傭兵達が襲撃した。巨鎧を使つており、本格的な戦闘であつた。そして、誰かを救出するとその場から去つて行つた。

自分はそれをまるで何かに縛るように追つた。

道は全く舗装されておらず足に小石が刺さり、皮がめくれ血が噴き出した。しかしそれでも追いかけた。長駆に慣れていたため、肺を口から吐き出しそうな中、息もままならない。それでも駆け続けた。その先に何かがある、なぜかそう信じていたのだ。すると、一人がまるで自分を待っているかのように立っていた。

男は自分を連れ、その場から離れた。

その男の名前はレイフといった。薄暗い青い髪をしており、目は反対に血のように濃い、赤色だった。そしてその背中は逞しく、時折懐かしさを覚えた。その後、レイフと付き合っているうちに、傭兵達から彼が天眼狼と呼ばれているのが分かった。

監獄から遠く離れた所につくと、レイフは両足の治療を済ますと果物を干したものを分けてくれた。それにむしゃぶりつくと、とても旨く不意に涙が零れ落ちた。味付けはわずかに糖が使われているだけのものであつたのだが、それが嫌に舌に、胸に染みた。久しぶりに満ちた食事だと思った。それが胸からこみあげ、嗚咽となつて現れた。

嗚咽が収まるまでレイフは何も言わず、麦飯を焼きながらただ果物を口に入れていた。

「どうして俺の後を追つた

焚火に薪を投げ入れながら、レイフは聞いた。わざとらしい西鈍りだつた。

「傭兵になりたかったから」

レイフは理由を聞くことはしなかつた。もしかしたら、解つていたのかもしれない。レイフは腰の小太刀を抜くと、こちらに放り投げるよう渡した。

「一度、振つてみろ」

自分は初めて、刃物の重さを知った。長くはないが、意外に重さがある。鞘を払い、刃を見つめる。どこか、怪しげな魅力があつた。鼓動が速くなる。それを背負うように構え、一度振り降ろした。感覚は、鶴嘴で土を掘るのに、どこか似ていた。

何を知りたかったのかは分からなかつたが、それを見たレイフはただ一言、毎日それを振るように言つた。頷くと、微笑んでくれた。その後、炊きあがつた麦飯を渡されたので、思い切りそれを腹に押し込んだ。

「名前は何という」

「エイジ……」

その後、この男のもとで傭兵として生きていぐのに必要なものを全て得た。レイフからもらった小太刀は未だに腰にあり、今乗つている巨鎧も戦場でレイフが討ち取つたものを、修理し使つている。剣術や体術も五年の傭兵生活で体に染みついた。言葉や知恵も戦場と陣営を転々としていくうちに身に着いた。

そして今、一人の兵として武器のそろつた自分は神との戦を始めたばかりだ。その宣戦布告に、兵達を扇動し多くの人間たちに無実の罪を着せたアロウを殺した。

傭兵を続けて得た情報があの男は、次々と領地を獲得していく神国に自分を売り込むために、近くを通る神兵たちに黒狼と、それをかくまう不届き者の密告により、神国からその信心を讚えられ聖職者への道が開き、持ち前の処世術で司祭にまで上り詰めた、といふ。アロウの出身地や、その時期に関しての情報を聞くまで見たことも聞いたこともない男だつた。

ガウスに雇われたのは、ある意味では運が良かつた。あの男のことだ。いきなり見ず知らずの自分のような男が近づくことは出来ないだろう。

ケイ、もといエイジは目を覚ます。昔の夢を見ていた。頭の奥が、鉛を詰められたように重く感じられた。騎神や巨鎧の操縦は、力だけではなく、主に気力を要する。それはまるで、弓矢を射るのに似ている。

ケイは彼の弟分の名前だ。ありふれた名前で、歳も自分とは離れているため、間違われて疑われるようなことは万に一つもないはずだ。

黒狼はひどい損傷を受け、とてもではないが、まともに戦えるようすではなかつた。あとほんのわずか、ガウスの最後の一撃がもう少し深ければ、あるいは拳がもう少し遅ければ自分は死んでいた。運が良かつた、と言える。もしかしたら、ガウスも同じようなことを、考えているかもしれない。拳がもう少し内へと延びれば、胸、搭乗部がある部分に当たつていたかもしないのだ。だが、そんな想像に意味はなかつた。

黒狼の全身の刃傷は素体でふさがり、銀色に浮かび上がつていた。だが、まだ牙は折れていらない。

後を追われている可能性があるため、急いで出立する必要があつた。

黒狼に乗り込むと、エイジは重い右の籠手をゆっくりと突き出すことで、黒狼をゆっくりと歩かせ始めた。そして腰の袋に手を伸ばし、そこから一つだけ掴む。表面に糖を塗した干した果物だ。保存食ということで、傭兵達がよく身に着けている。干し肉につける塩や香辛料は高価であり、何より疲れやすくなるので、エイジはあまり多くは肉を持たなかつた。他にも食料として、米などの穀類を、持つている小さな鍋で炊く時もある。

かじると、舌の上に糖の甘みが広がり、レイフに初めて会つたあの日のことを、今でもはつきりと思い出すことが出来た。

胸に手をやると体内に脈動する血は未だ沸き立つたままだつた。おそらく、この熱が失われるのは、自分が死んだときか。

神を殺した時だけだ。不意に、そうつぶやいていた。

第一章 第四部（後書き）

これで、第一章は終わります。第一章からはじめてのよつた形式で掲載していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7250z/>

鋼騎伝

2011年12月26日20時57分発行